

教宣 せぶん

なぜ社長の「テレビ出演」が18日なの？

本日18日、社長が衛星放送に登場し、「RA制度の発展的解消」について全社員にむけて状況説明をしていました。柔和な表情とソフトな語り口で、「誠意を込めて対応していくこと」を誓っていました。もし私が、全損保に所属し差別的な対応をされていなかったとしたら、おそらく社長の物腰の低さと誠実さに感銘を受けていたかもしれません。

全国の課所長が本社に集められ本件が公表され、全社員宛にメール配信されたのが7日。率直な疑問として、なぜ10日以上も経過して社長は「テレビ出演」したのでしょうか？ 衛星放送で社長が発言した趣旨のように、本当に社長が私たちのことを考え、本当に私たちの将来を気にかけているのなら、7日ないし11日に社長は「テレビ出演」すべきではなかったでしょうか。これだけの暴案を当初はそれほどの「重大事項」とは思っていなかったことが容易に伺えます。おそらく、当初のモクロミが外れ、回りの誰かから本件の重大さを説かれるか、予想以上の波紋の広がり、急遽イヤイヤ出演する羽目になったというのが舞台裏なのではないでしょうか。

社長の「テレビ出演」が終わると、支社長が間髪入れずに「私たちも支社をあげてRAのみなさんを支援していく」というメッセージを支社の全員に発しました。説明会の席でも心配そうな顔で同様のことを言っていました。しかし、支社長ができる私への最大の支援は、この暴案の白紙撤回を求めて一緒にたたかってくれることです。すべて会社のマニュアル通りに忠実に動いている支社長に、それを求めても無理なところか、支社長は一人ひとりの反応を逐一本社に報告しています。いまの彼らの使命は、私たちに波風立たずにこの会社から去って行ってもらうことです。もしかしたら、それが彼らの評価に結びつくのかもしれません。

いずれにしても、この経営は片手でマングローブを植えながら、片手で大量の紙を無駄使いするような経営だということが、この1年でよくわかりました。「植林」も本心から地球環境を考えての施策ではなく、単なるステークホルダーへのパフォーマンスであることが伺えます。そして、口で言っていることと腹では違う狡猾さを持っていることも身を持って知りました。その裏腹な経営理念の一端が、本日18日の「テレビ出演」にあらわれたのではないのでしょうか。